

模範であると評価する。この建前論は中国共産党の歴史上の人物再評価路線にそうものであり、祖国近代化への華僑投資優待の政策と密接な関係がある。中国近代化に貢献した嚴復、愛国政治家康有為、香港解放の愛国先駆者林則徐、台湾解放の愛国華僑鄭成功らの偉業をたたえる路線と軌を一にするものである。港澳同胞、台湾同胞、海外僑胞、外籍華人は陳嘉庚を模範とし愛国愛郷華僑の誠意を示すべきだという建前論に他ならない。

1980年代に入ると、中共中央と国務院は対外解放政策を推進し、沿岸港市の14の経済技術開発区に導入外資の審査権限を一部委譲した。許認可業務を握る地方官僚の権威が高まる一方で、華僑合弁企業は合作の相手方にふさわしい信頼と忠誠を保証するために、子弟を祖国の華僑学校へ留学させたり、校友会組織等を通じて華僑学校へ設備と備品を寄付する傾向がめだった。アモイ、泉州、福州各地の華僑大学、高中学校における筆者の現状調査資料によれば、文化大革命当時に破壊された校舎の復旧や新式の科学教材の寄付を主として南洋華僑に依存している。帰国華僑連合会の建物、自動車、機器に至るまで同様である。しかも、一世華僑が引退しつつある東南アジア経済界を担っている二世華人の寄付が多い点は注目に値する。

元来、南洋華僑は清朝末期から郷土社会に貢献してきた長い伝統をもち、企業収益の高い山東半島や上海へ投資した人びとも郷土開発への愛郷心を同時に発揮してきた。かかる愛郷華僑の伝統と港市の朝貢貿易を司った地方官僚の権威の伝統を考えるならば、合弁企業を担う華僑側が一種の政治的保険として子弟を華僑学校へ留学させたり、学校修復へ寄付したりする行為を理解することができる。しかし、華僑の心の深層にある宗教と民間信仰の中国性が根強く残存している事実も見逃してはなるまい。たとえば、莆田の禪宗寺院、台湾海峡に浮かぶ小島のマソ廟、福清の王氏宗祠堂などの再建現状調査例からみると、文化大革命当時、迷信の的とされ破壊された建物を最近数年間に修復した蔭の力は寄付兼ねを積んだ東南アジア経済界の二世華人なのである。また、米国、日本、台湾在留華人の浄財もその寄付名簿に記されている。

これらの新事実は合弁企業に進出する投資家を超えた在外華人の本音を物語っている。そこには、現住地文化へ変様していく華人の姿を追ってきた従来の諸説が見落としてきた、伝統中国文明の持続性をもつ華人の影が映っている。

フィリピン労働法とアジア的労使関係

神尾真知子

フィリピンの集団的労働法を歴史的に見ると、三つの時代に区分することができる。

1936年から1953年にかけての強制仲裁制度時代。産業関係裁判所が設けられ、それが強制的に労使紛争を処理した。また、厳しい組合登録制度も設けられ、未登録組合に対しては組合として活動する保障を与えなかった。この時代の労働立法は強権的性格が色濃く、植民地下アジア法体制の統制法理に支配されていたといえよう。

第二次世界大戦後、未登録組合の増大や強制仲裁の機能低下にみられるように強権的な労働立法は行き詰まった。そこで、ビジネスユニオニズムを基調とするアメリカ労使関係制度がフィリピンに移植された。

1953年から1974年にかけての団体交渉制度時代。産業関係裁判所の権限を限定し、労使紛争の処理は労使自治に委ね、政府の介入をひかえた。組合登録制度も廃止された。すなわち、労働力商品の取引という団体交渉を中心に据えており、基本的には市場法理によって支配されている労

働立法であった。

しかし、自由な団体交渉制度はフィリピンに根づくことは出来なかった。そこで、過去の失敗に学びつつ、経済発展を志向して新たな労働立法がなされた。

1974年以降の任意仲裁・強制仲裁の枠内での団体交渉制度時代。団体交渉を基本に据えているが、「任意仲裁・強制仲裁の枠内での」という形で労使紛争への政府の介入を認めた。労使自治に委ねた枠づけのない団体交渉では使用者と対等の立場に立つことが出来ない労働組合に対して、仲裁を通して政府が介入し労使の力のバランスをとり、政労使の三者主義によって紛争を解決しようとする制度である。

労使関係を経済発展に方向づけるためには経済発展計画の立案者である政府が、労使の対立する利益を調整する必要がある、三者主義の採用は、発展法を支える統制法理が端的に表れているといえよう。

また、フィリピンの任意仲裁に至る苦情処理手続きでは、上の段階に行くにつれ、労使間の話し合いの要素が強くなっており、最終的に第三者が労使の調和をはかり合意に導く。労使紛争の処理において、衝突よりも協調を求める共同体法理が浸透していることを示している。

現在のフィリピン労働法は、団体交渉にみられる市場法理、三者主義にみられる統制法理、そして協調的労使関係にみられる共同体法理が交錯しながら、その法体制を形成している。これが、アジア的労使関係として概念化されるものである。

天の川を Bima-Sekti と呼ぶジャワ人の神話的論理

中島成久

一、天の川の「北の石炭袋」と呼ばれる蛇遣座、射手座。蠍座付近の巨大な暗黒部をジャワ人は、ワヤンの英雄、剛勇のビモの姿とみなしている。ジャワ語でそれを 'Bima-Sekti' (ビモ・セクティ) と呼んでいる。更に、天の川全体をも 'Bima-Sekti' と呼ぶが、その時は「ビマ・セクティ」と発音され、インドネシアの他の地域と共通な呼称法となる。報告者の問題は、何故天の川の暗黒部がジャワで「ビモ・セクティ」と呼ばれるのか、また、数多いワヤンの英雄のうちで何故ビモの姿が投影されているとみなされているのか、その背景となる神話的論理は何なのかを明らかにすることである。

セクティとはサンスクリットのシャクティのことで、一般に「呪力・超能力」のことである。ワヤンのキャラクターの中でビモは、このセクティを最も体現した人物である。ビモの一生は、誕生、結婚、子供の出生といったあらゆる段階でセクティに満ちている。

ビモに関するラコン(演目)のうち最も有名なものが「デウォルチ」である。デウォルチは、クジャワンと呼ばれるジャワの神秘主義の理想を感動的なまでに追求する。ワヤンの正義を代表するパンダワ軍にあってビモは荒ぶる神の側面を持つが、そのビモの過剰なまでの荒々しさは内面の自己(=神)を求める真摯な姿でおぎなわれ、ビモの魅力を豊かなものとする。しかも、デウォルチを構成する世界を整理すると、ジャワの宇宙論と深くつながっていることに気が付く。旧師の嘘に由来するとはいえビモは、月面山の麓におもむき、飛ぶようにして走り、自然界の声援をうけ、海中でデウォルチ(自分自身=神)に出会い、宇宙の運行をも統べる秘義を身につける。だがビモは死者の世界に足をふみこんでいた。

二、ジャワ人の想像力の中でビモは、あらゆる世界を通過しうる能力を持つ。それは、自然界